【ポスター発表】

実習プログラミングにおける実習先指導者－養成校教員－実習生の三者協働プロセスに関する実証的研究

○　聖カタリナ大学　高杉　公人（会員番号 5504）
川島　惠美（関西学院大学・3274）、中島　尚美（大阪市立大学・7646）
梓川　一（関西学院大学・3695）、　岩本　裕子（関西学院大学・7838）

キーワード：社会福祉士実習、実習教育、実習プログラミング

１．研 究 目 的

2007 年度の社会福祉士及び介護福祉士制度改正以降、大学や専門学校などの養成校には、ジェネラリスト・ソーシャルワークの視点を持ち、総合的かつ包括的な相談援助を展開できる人材養成を目指した教育カリキュラムが求められるようになった。特に相談援助実習においては、実習生が実践力を養う体験を得ることができるように、養成校教員、実習生、実習先施設・機関の指導者の三者が協働して実習目標を立て、目標に沿った内容をプログラム化する実習プログラミングが義務付けられた。しかしながら、実習プログラミングは特に実習先指導者への負担が大きいことから、すべての実習先施設・機関で適切に実習プログラミングが行われているとは言い難い。

このような状況を鑑み、関西学院大学　実践教育研究会では、2008 年度から 2010 年度にかけて模範的な実習を行っている実習先指導者と領域別（児童・母子、高齢者、障害児・者、地域（社協）、病院）研究グループの立ち上げを行い、領域別実習モデルプログラム開発を実施してきた。実習モデルプログラムを創り上げることによって、他の実習先施設・機関の指導者を支援し、実習プログラミングを容易にすることを目指した。

しかしながら、実習プログラミングは単に「実習プログラムの作成」だけを意味するのではなく、養成校教員、実習生、実習先指導者がいかに協働してプログラムを創り上げたかという「三者の協働性」が重要となる。その為、本研究では実習事前学習や事後学習を含めた実習プログラミングにおける三者の協働プロセスにフォーカスを当て、三者がどのような役割を果たしながら実習教育プログラムを創り上げたのかを実証することを主目的とした。

２．研究の視点および方法

本研究では、領域別実習モデルプログラムを創り上げた 9 施設・機関の実習先指導者、その実習内容を体験した実習生、そして実習指導及び実習巡回指導を行った養成校教員の三者に実習プログラミングシートの内容をどのように実践したのかについて半構造化インタビューを行った。そしてインタビュー内容のテープ起こしを行い、内容を質的に分析した。分析した内容は本研究会が開発した「三者協働プロセスシート」にまとめて、実習プログラムの内容に対応して三者が協働したポイント（コラボポイント）を抽出した。

３．倫理的配慮

実習先指導者については、本研究に賛同して頂いた方のみにインタビューを実施し、発言をまとめた三者協働プロセスシートの内容について事前確認をして頂き、所属先施設・機関の許可を得て公表を行った。更にインタビューを受けた実習生、養成校教員についても、同様のプロセスを経て本人の許可を得ており、個人名は非公表とした。発言内容はすべてポイントのみを三者協働プロセスシートにまとめ、発言内容や言い回しで個人が特定されないよう配慮した。

４．研 究 結 果

事前学習時に、殆どの実習先施設・機関で、養成校教員、実習生、実習先担当者の三者協働におけるポイントとなっていたのは「実習事前訪問」であった。特に養成校教員が事前訪問に同席し、実習生の目標と実習先が提供できる実習体験との摺り合わせをする作業が重要であることが浮き彫りとなった。養成校教員が実習生と実習先指導者の間に入ることで、後の実習生の目標修正や実習先指導者の実習内容の調整がスムーズに行われることが再確認された。また、一部の実習先施設・機関では、事前訪問よりも前から養成校教員が入り込み、実習先指導者が自身の活動内容を実習プログラムに落とし込む作業を支援することで、実習先指導者の施設・機関内で社会福祉士としての位置づけが明確になるという波及効果も生じていた。この結果から、できるだけ事前学習の早い段階から養成校教員と実習先担当者が協働することが重要であることが明らかとなった。

実習中では、予想通りに「巡回訪問・帰校日指導」が三者協働の重要なポイントとなっており、実習体験を経て変化する実習生の実習目標に合わせて、養成校教員が可能な範囲で実習内容の調整を行うことの必要性が調査結果より見受けられた。また、巡回訪問時の実習目標の調整には、実習生の実習モチベーションや心身の状況が影響しており、養成校教員と実習先指導者がそれを確認する事が前提条件となっていることも判明した。

実習事後では、基本的に養成校教員と実習生との二者による「実習指導」が中心となるが、実習指導の授業内で養成校教員が実習評価表の実習先指導者からのコメントを活用して実習生の今後の課題への取り組みを指導しており、実習評価における三者協働の重要性も明確となった。

5. 考 察

本研究において、改めて教員、実習生、実習先担当者の三者による協働が、実習前、実習中、実習後のすべての実践教育プロセスにおいて重要であることが再確認された。特に養成校教員は、できるだけ早くから実習先指導者と連携し、実習生と実習先指導者の「仲介」役を果たすこと必要があることが明らかとなった。

本調査の限界としては、調査対象が実習モデルプログラムを作成出来た「成功例」の三者協働の状況に関する結果に留まっていることである。今後は、実習プログラミングの阻害要因の研究も行い、そのような場合の三者の役割を考察する追加研究も必要と考える。